

量子論から一般相対論を導出する

清水 哲男 (Tetsuo Shimizu)

量子論と一般相対論とは、物理学のみならず全自然学の基礎であるが、その統一は「無限論」に由来する「発散の困難」に直面し、20世紀初頭における登場以来今日に至るまで完成していない。わが「ディラック対の概念(concept of Dirac pair)」は、①「量子論の公理: $[\partial_x, d_x]=1,$ 」それのみから構成論的に出発し、② 基本ディラック対の「長さ」状態: $P_x,$ と、「速さ」状態: ${}^A D_x,$ と、が、「ハミルトニアン: ${}^A H_x,$ 」によって「往復運動」を行っており、③それらの「量子論的・重ね合わせ」から成る「正反」量子が、④一般相対論の「要請(postulate)」である「光速度不変の原理」および「等価原理(慣性質量=重力質量)」を充たす「慣性運動」を行っていることを、「トートロジー(恒等式)」のみを用いて証明することができた。「量子論の公理」のみから「一般相対論的運動論」が導出できたのである。証明過程の要所を以下に概論する。

「長さ」状態の基本ディラック対: $P_x,$ を、「微分演算子: $\partial_x,$ 」および「積分演算子: $d_x,$ 」の対として定義する。この2行1列の行列形式で書かれる演算子には、「対称クロス積: $\otimes_S,$ 」「反対称クロス積: $\otimes_A,$ 」「単純乗積(巾乗積)」、および、「自己内部微分: $D(P_x),$ 」が定義できる。基本ディラック対は、これらの演算について「演算子代数システム(algebraic system of operator(s), 「作用素環(ring of operator)）」を生成し、かつ、「演算: \odot_A 」について、以下の「恒等式列(tautology)」が成立している。

$$P_x \triangleq \begin{pmatrix} \partial_x \\ d_x \end{pmatrix}, ([\partial_x, d_x]=1), S_x \triangleq P_x \otimes P_x, A_x \triangleq P_x \otimes_A P_x = 1/2,$$
$$S_x \odot_A P_x \triangleq \left(\begin{bmatrix} \partial_x, S_x \\ S_x, d_x \end{bmatrix} \right) \left(\begin{bmatrix} \partial_x^2/2, d_x \\ \partial_x, d_x^2/2 \end{bmatrix} \right) \triangleq D(P_x) P_x^2 / 2 = \{A_x, P_x\} = P_x.$$

基本ディラック対のアフィン変換で、「量子論の公理」を不変に保つものを「ゲージ変換(gauge transformation)」と呼ぶが、その表現は、「 $SL(2, \mathbb{C})$:行列式=1, の2行2列の複素行列」=「ローレンツ群の開被覆群」である。ここから、2種の基本ディラック対として、「長さ」状態: $P_x,$ と、「速さ」状態: ${}^A D_x,$ の存在が導出できる。また、

P_x , と ${}^\lambda D_x$, との対称クロス積として「ハミルトニアン(Hamiltonian): ${}^\lambda H_x$,」が定義でき, それは「周波数: $\omega=1$,」の, 「重力場内のガリレイの振子」=「『等価原理(慣性質量=重力質量)』を充たす運動体」の存在に対応している.

$${}^\lambda D_x \triangleq \begin{pmatrix} \lambda d_x \\ -\partial_x / \lambda \end{pmatrix}, ([\lambda d_x, -\partial_x / \lambda] = 1), -S_x = {}^\lambda D_x \otimes_S {}^\lambda D_x, -S_x \odot_A {}^\lambda D_x = {}^\lambda D_x,$$

$${}^\lambda D_x \otimes_S P_x \triangleq {}^\lambda H_x = -(\partial_x^2 / 2) / \lambda + \lambda(d_x^2 / 2), (\leftrightarrow (th))((p_x^2 / 2) / m) + m q_x^2 / 2.)$$

「ハミルトニアン: ${}^\lambda H_x$,」は, 「長さ」状態: P_x , と, 「速さ」状態: ${}^\lambda D_x$, との間に, 「往復運動」を引き起こしていることが, 以下のように証明できる.

$${}^\lambda H_x \odot_A P_x \triangleq \begin{pmatrix} [\partial_x, -(\partial_x^2 / 2) / \lambda + \lambda(d_x^2 / 2)] \\ [-(\partial_x^2 / 2) / \lambda + \lambda(d_x^2 / 2), d_x] \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \lambda d_x \\ -\partial_x / \lambda \end{pmatrix} = {}^\lambda D_x,$$

$${}^\lambda H_x \odot_A D_x \triangleq \begin{pmatrix} [\lambda d_x, -(\partial_x^2 / 2) / \lambda + \lambda(d_x^2 / 2)] \\ [-(\partial_x^2 / 2) / \lambda + \lambda(d_x^2 / 2), -\partial_x / \lambda] \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \partial_x \\ d_x \end{pmatrix} = P_x,$$

$$\Leftrightarrow P_x \xleftrightarrow{{}^\lambda H_x} {}^\lambda D_x.$$

「一般的基本ディラック対: $P_x(\theta)$,」は, 「長さ」状態: P_x , と, 「速さ」状態: ${}^\lambda D_x$, との「量子論的・重ね合わせ」であり, $P_x(\theta) \triangleq P_x \cos \theta + {}^\lambda D_x \sin \theta, (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta = 1)$

と書くことができ, また, $P_x(\theta)$, と, P_x , との対称クロス積は,

$$G_x(\theta) \triangleq P_x(\theta) \otimes_S P_x = S_x \cos \theta + {}^\lambda H_x \sin \theta,$$

$$G_x(\theta) \odot_A P_x = P_x(\theta), G_x(\theta) \odot_A P_x(\theta) = P_x,$$

$$\Leftrightarrow P_x \xleftrightarrow{G_x(\theta)} P_x(\theta),$$

であり, 「ゲージ変換演算子: $G_x(\theta)$,」は, P_x , と, $P_x(\theta)$, との間に, 往復運動を作り出している. これに, $\theta = i\tau$, と置けば「ローレンツ変換」が得られる. 2組の「速さ」状態: ${}^\lambda D_x$, の対称クロス積は, $-S_x$, であるから, それは「長さ」状態: P_x , を「『反』

長さ」状態: $-P_x$, に変換し, 「長さ:0」状態の空白領域: $P_x - P_x = 0$, を出現させ, 「速

さ」状態: ${}^\lambda D_x$, を, 「前へ」と「慣性運動」させる. 最終的には, 「速さ」状態: ${}^\lambda D_x$, は,

「mass shell equation」を充たす「一般相対論的・慣性運動体」すなわち「光量子(photon)」を伴う「電(量)子」を生成していることが証明できた.